

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

役割語：  
文法論とコミュニケーション論を横断する新概念  
(特集・言語学最新キーワード12)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金田, 純平 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5830">http://hdl.handle.net/10502/5830</a>

# 役割語

▼やくわりご▲

— 文法論とコミュニケーション論を横断する新概念

金田純平

(かねだ じゅんぺい)

## 一 役割語とは

マンガや映画などのフィクション作品では、登場人物はその役柄に応じて特徴的な言葉づかいをすることが観察される。例えば、天才科学者である博士役は「そうじゃ、わし」が知

っている」と言い、お嬢様役は「そうですわよ、わたくしが存じておりますわ」といった言葉づかいをするように。この

ような、人物像に応じた言葉づかいのことを、金水(三三)

は役割語 role language と呼んでいる。また、それぞれの言葉づかいを、対応する人物像になぞらえて「博士語」や「お

嬢様言葉」などのタイプ分けができる。これらのほかにも、役割語のタイプには左のようなものが挙げられる。

- ・ 平安時代の貴族役「まろは京に戻るでおじゃる」
- ・ 侍・忍者役「拙者、服部半蔵でござる」
- ・ 田舎者役「おら、そげんこと知らねえだ」
- ・ 中国人役「これは何アルか」「早く行くよろし」
- ・ 関西人役「わては元漫才師でおまんねん」

役割語の各タイプに共通する言葉づかいを最も特徴付けているものは、自称詞(あるいは他称詞)と語尾(終助詞・断定表現など)であり、それは実際の話し言葉においても、

「ぼく」「あたし」のような性別による使い分けや、敬体・常体または共通語・方言の切り替えなどに見られるものである。このほか役割語のタイプを特徴付ける要素として、金水(二〇〇三)は、訛り、感動詞、笑い声、音声的特徴(声の高さ、発話速度)を挙げている(二〇〇三・三五二七より抜粋)。また、勅使河原(二〇〇七)は、日本のアニメの善玉・悪玉キャラクターと声の関係について咽頭形状が関係していることを、音声知覚実験を行って明らかにしている。

上で見た役割語のタイプを特徴付ける要素は、現実の話し言葉においても、例えば、男性専用の自称詞「ぼく」と「おれ」が相手や発話の場によって使い分けられたり、電話での応対では普段に比べて声が高く息混じりになったりするようになり、スピーチスタイルにも共通するものである。その意味でも、役割語はコミュニケーション研究において有用な概念であり、「発話キャラクター」(定延二〇〇六)にも繋がる(詳細は四節を参照されたい)。

## 二 観念としての役割語

金水(二〇〇三)による役割語の定義は次のとおりである。

ある特定の言葉づかい(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと特定の人物像(年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等)を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。(二〇〇三：二〇六)

先の博士の例で言えば、自称詞に「わし」、断定表現に「〜じゃ」を用いる人物は博士や老人であることがすぐさま喚起され、逆に博士や老人といった属性を持つ人物は「わし」「〜じゃ」を使うだろうというイメージが湧くというように、人物像と言葉づかいの双方向の対応関係が役割語の成立の基盤になっている。

しかし、役割語においてはその対応関係が現実のものから乖離している場合が多い。例えば、現在の現実世界における博士が「わしはそう呼んでおるのじゃ」などとは言わず、育ちのよい女性が今時「よくつてよ」といった言葉づかいをしない。それにもかかわらず、これらの言葉づかいが博士やお

嬢様といった人物像に結び付けられてしまっている。この背景には、言葉づかいの脱コンテクスト化がある。

役割語には、そのモデルとなる言葉づかいが実際に、ある時代のある属性の話者の間に存在していた場合が多い。金水(2003)によれば「博士語」は一八世紀後半から一九世紀初頭ごろの江戸の老人語、「お嬢様語」は明治〜大正時代の女学校で広まった言葉づかいである。ここでは、話者の性別・年齢などの属性や社会的位相といったコンテクストと強く結びついていた。そして、それがメディア(狂言・歌舞伎・落語といった芸能や小説・映画・ドラマ・マンガなどの作品、またはニュースや雑誌などを含めて)で再現されることにより、言語変化やコンテクストから独立したかたちで、人物像と言葉づかいの関係が具体化される。それが繰り返される結果、現実における人物像とその言葉づかいとは独立して、主にメディアから得られる仮想現実としての人物像と言葉づかいの関係がステレオタイプとして社会に広く浸透することを背景にして、役割語が成立している。また、脱コンテクスト化によって、役割語自体が対応する人物像を受け手に想起させる形式になり得たとも言える。

また、役割語には、例えば平安貴族のように現存しない人物像と「くでおじやる」などの言葉づかいの対応関係も見られるが、金水(2003)によると実際には室町後期から江戸初期の京都の民衆言葉であり、平安貴族が使っていない点で現実とは乖離しており、これもメディアを通じて拡大されたステレオタイプに基づく仮想現実上の言葉づかいである。

### 三 役割語の言語間対照

#### 三―一 言語変種

役割語は日本語だけにとどまらず、他言語にも見られる。

日本語の役割語は一節で挙げたように、人称代名詞や語尾(次節で詳しく取り上げる)によって特徴付けられることが多く、中国語や韓国語にもこの手法は観察される(定延2007、定延・張2007)。しかし、例えば英語のように人称代名詞のバラエティが限定され終助詞のない言語では、①方言を用いることでその方言話者のステレオタイプ(人物像)と結びつける(詳しくは山口(2007)、鄭(2007)、ガウバツツ(2007)を参照)、②/s/を/ʃ/に変えて幼児らしくするなど特定の音素を変えてデフォルメする、③名詞や動詞を屈折さ

せずすべて主格や不定法にすることで幼児や純朴な人物のイメージを出す、などのパターンが見られる。このような役割語は、日本語においても方言的表現や「〜でちゅ」という語尾、無助詞や終止形の使用などにおいて見られ、共通する特徴を有している。

### 三二 キアラ語尾

日本語の役割語において、文末形式は人称代名詞とともに重要な要素であり、様々な人物像を喚起することができる。博士や老人の使う「〜じゃ」はその典型である。「〜だべ」「〜やねん」「〜ですたい」のような方言由来の文末形式は、それぞれ東北人／北関東人、関西人、九州人のステレオタイプとしての人物像（例えば、朴訥さ、芸人風、男らしさ）を想起させる（cf. 「ニセ方言」、田中2007）。更に、「〜でおじやる」「〜ざんす」「〜つす」といった語尾も、順に平安貴族、嫌味な人、体育会系といった属性に結びついている。

このような人物像と結びついた文末形式を金水（2003）は「キアラ語尾」と呼んでいる。キアラ語尾には、犬が「僕が行くわん」というような動物キアラクタのものや、さらには

「そういうことぶう」のように具体的なイメージと対応しない（しかし、ナゴミ系・癒し系の雰囲気がある）ものもあり、子供向けメディアに限らずブログ記事などに観察される。

キアラ語尾は中国語や韓国語にも見られ、これらの言語との対照を通じて「キアラコピュラ」「キアラ終助詞」「キアラ助詞」の三種のサブタイプが観察されている（定延・張2007、定延2007）。キアラコピュラは、「〜でおじやる」「〜ざんす」「〜でちゅ」のように断定表現がその中核であり、また、標準語のコピュラ「だ」「です」とは違って「行くでござる」のように動詞にも接続する。キアラ終助詞は、例えばニセ方言の語尾「べ」（例「そうだべ」「行くべ」）や、インターネットで使われる「よ」のデフォルメ形式「お」（例「そうだお」「行くお」）のように、コピュラ・動詞・形容詞に続く終助詞の位置に現れる。キアラコピュラ・キアラ終助詞はそれ自体に何らかの人物像を担っているものの、それ自体は本来のコピュラや終助詞としても機能する変種でもある。

しかし、「うそだよーん」の「びょーん」のように終

助詞よりも更に後ろの位置に現れるキャラ語尾もある。これは、キャラコピーラ／終助詞とは違って文法的な役割を持たず、人物像（のようなもの）しか表さない言語形式であることから、とりあえず「キャラ助詞」として位置づけられる。

キャラ語尾の観察は現在のところ日中韓の三言語に限られるが、例えば、英語圏のコントで、イギリスの労働者役の演者が発話末に間投的呼びかけ *guy* 「ダンナ」を使用する (BBC・*Monty Python's Flying Circus* など) で確認できるように、文末形式が特定の人物像と結びつくことは案外多くの言語に見られる特徴なのかもしれない。

#### 四 役割語とコミュニケーション——発話キャラクタ

役割語の概念は、言葉づかいのバリエーションという点では、現実の話し言葉におけるスピーチスタイルとも共通している。しかし、現実の話し言葉でのスタイルは相手との関係などの社会的位相に関係して同一人物が使いつける (CIT 渋谷 2006) のに対し、役割語はもっぱら話者の人物像や人格に對して固定的に言葉づかいが与えられる点で大きく異なる。

だが、話し言葉におけるスタイル切り替えと役割語は無縁

ではない。例えば組織において、自分の上司に対しては敬語を使い、部下に対してはぞんざいに言うような使い分けが考えられるが、それは話者の内部では自己を部下として位置づけて話すか、上司として位置づけて話すというかの選択の問題であるとも言える。つまり、人物像としての「上司」「部下」が話者内部にモデルとして存在し、それを呼び起こす形で発話する点で、基本的にフィクションにおける役割語使用と同じことを話者は行っている。<sup>(注)</sup>

このように、話者がある人物像に結びついた発話の型に基づいて発話する場合、その人物像を「発話キャラクタ」(定延 2006) と呼ぶ。発話キャラクタは、役割語における《人物像—言葉づかい》の関係を拡張し、発話の型(発話行為)を対象に含む。例えば、東京の高校生による「なんでやねん」という発話は、ツッコミの発話行為を得意とする関西人の発話キャラクタを臨時的に発動させてそれを発話すると説明できる。役割語の拡張としての発話キャラクタの概念は、発話の型についての分類・記述にも役立つ(金田・澤田・定延 2006)。

## 五 関連領域への応用——役割語研究の展望

林 (2007) は、外国人力士の力士らしい話し方 (お相撲さんキャラ) の習得について、言語習得論をベースに役割語・発話キャラクタの概念を導入して論じている。

また、近年の若者のコミュニケーションでは、集団のメンバーに対して「ボケキャラ」「ツッコミキャラ」「いじられキャラ」「天然キャラ」が与えられ、これに応じた役割を演じなければならぬコミュニケーション様式が指摘されている (瀬沼2007)。この現象に対して役割語・発話キャラクタからどのようにアプローチできるのか、今後の研究が期待される。

付記・本稿は科学研究費補助金基盤研究(A) (課題番号: 19202013、研究代表者: 定延利之) の成果の一部である。

### 【注】

金田・澤田・定延 (2000) でも同様の例を挙げているが、そこではあくまでスタイルの変化の例であり、違った人物像の発動という見方は、筆者がとったものである。

### 【参考文献】

ガウバツ、トーマス・マーチン (2007) 「小説における米語方言の日本語訳について」、金水 (編)、一五二―一五九。

金田純平・澤田浩子・定延利之 (2000) 「コミュニケーション・文法とキャラクタの関わり」『言語』三七一、大修館書店、五―一五。

金水敏 (編) (2007) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店。

定延利之 (2003) 「ことばと発話キャラクタ」『文学』七六、岩波書店、二七―二九。

定延利之 (2005) 「キャラ助詞が現れる環境」、金水 (編)、二七―四六。

定延利之・張麗娜 (2007) 「日本語・中国語におけるキャラ語尾の観察」、彭飛 (編) 『日中対照言語学研究論文集』和泉書院、九九―二九。

渋谷勝己 (2000) 「スタイルの使い分けとコミュニケーション」『言語』三七一、大修館書店、一八―二五。

瀬沼文彰 (2007) 「キャラ論」スタジオゼロ。

田中ゆかり (2007) 「方言コスプレ」にみる「方言おもちや化」の時代」『文学』八六、岩波書店、一三―一三。

鄭惠先 (2005) 「日韓対象役割語研究——その可能性を探る」、金水 (編)、二九。

勅使河原三保子 (2007) 「声質から見た声のステレオタイプ——役割語の音声的側面に関する一考察」、金水 (編)、四九―六六。

林良子 (2007) 「外国語発話音声に見られるキャラクタの習得——外国人力士のインタビュー分析を通して」、定延・中川 (編) 『音声文法の対照』くろしお出版、二六―二八。

山口治彦 (2007) 「役割語の個別性と普遍性——日英の対照を通して」、金水 (編)、九三。

(神戸大学大学院国際文化学研究所)

言語論・文化情報リテラシー

言語論・文化情報リテラシー